

東濃地方の芝居等文化資源記録プロジェクト

——2023年度飯地五毛座歌舞伎保存会の活動について——

The Tono Region's Ji-Shibai Cultural Resource Documentation Project:

Activities of the Iiji Gomoza Kabuki Preservation Society in Fiscal Year 2023



永田典子 NAGATA, Noriko

中部大学 人文学部 日本語日本文化学科 教授

愛知県出身。甲南女子大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。修士（文学）。専門分野は説話文学、民俗学。研究テーマは、伝承文芸の文化的位相。主な著書に『愛知県史 別編民俗1』（共著、愛知県、2011年）、『尾張伝説考』（中部大学、2021年）、論文に「犬頭糸説話に関する一考察」（『人文学部研究論集第32号』、2014年）などがある。



嘉原優子 YOSHIHARA, Yuko

中部大学 人文学部 日本語日本文化学科 教授

兵庫県出身。関西大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。専門分野は宗教学、民俗学、文化人類学。研究テーマは、日本を含むアジアの宗教儀礼や奉納芸能、神観念について。主な著書に『バリ島の村落祭祀と神観念』（おうふう、2010年）、論文に「バリ島の仮面—ランダの行方—」（『アリーナ第22号』、2019年）、「バリ島の長老集団の役割と構成について」（『アリーナ第23号』、2020年）などがある。

ABSTRACT

In FY2023, this project recorded the process leading up to the resumption of Ji-kabuki performances by the Iiji Gomoza Kabuki Preservation Society. The Ji-kabuki performance at Gomoza, which had been suspended due to the spread of coronavirus infection, was held on April 15, 2023 for the first time in five years. In addition to Gomoza Kabuki members, participants expanded to include the surrounding area for children's kabuki, and under the guidance of choreographer Danjo Matsumoto, they practiced 15 times before the actual performance. The Kabuki performances were “Kotobuki-Shiki-Sanbaso”, “Shiranami Gonin Otoko”, and “Imoseyama Onna Teikun”, and “Nakanoho Mereta Daiko” performed from Nakanoho Town. On the day of the performance, a temporary parking lot was set up, and a tent with local specialties was set up in front of the theater to welcome audiences from nearby and far away. At the performance, huge bags of money were thrown in to praise the performers' enthusiastic performances. Iiji Town has provided elementary and junior high school students with opportunities to become acquainted with Ji-Kabuki, but in addition to this, expanding the range of participants not only to Iiji Town but also to surrounding areas is also an important way to pass on the performing arts. It is considered effective.

1. 2023年度の活動について

本プロジェクトは、2019年に「持続可能な文化—東濃地方の芝居等文化資源記録」プロジェクトとして始まり、2023年度からは「持続可能な社会—東濃地方の地芝居等文化資源記録」プロジェクトとして岐阜県恵那市における調査を継続してきた。

2023年度は、新型コロナウイルス感染拡大によって中断されていた恵那市飯地町の国登録有形文化財・五毛座（恵那市飯地町185番地1）における地歌舞伎公演が、5年ぶりに開催された喜ばしい年となった。我々プロジェクトのメンバーにとっても五毛座において、地歌舞伎を実見する初めての機会となった。本来ならば、2020年4月、2022年4月と隔年で上演されるはずであったものである。

第30回となった飯地五毛座地歌舞伎公演は、笠周三町伝統芸能祭と銘打たれ、飯地五毛座歌舞伎保存会メンバーだけでなく、笠周地方（笠置町・中野方町・飯地町）の子どもたちや中野方

れた囃子保存会も出演するものとなった。少子高齢化が大きな問題となっている笠置地域が連携することで、地域の伝統芸能への関心や郷土愛を高め、町づくり活動のつながりを強めることを目的としたものである。

2. 五毛座における歌舞伎公演の事前準備について

第30回飯地五毛座歌舞伎公演のスケジュールは、以下のものであった。

日時：2023年4月15日（土）11時開場12時30分開演

12:30 飯地子ども歌舞伎「寿式三番叟」

13:00 中野方めれた囃子保存会「中野方めれた囃子」

13:40 笠周子ども歌舞伎「白浪五人男 稲瀬川勢揃いの場」

14:35 飯地五毛座歌舞伎保存会「妹背山婦女庭訓 御殿の場」

15:35 終演

会場は五毛座、主催は飯地五毛座歌舞伎保存会、共催は笠置地域協議会、中野方地域協議会、中野方めれた囃子保存会、後援は恵那市および恵那市教育委員会である。

飯地町では、公演準備のために2023年2月26日に五毛座2階広間において、初会合が開かれ、振付師・松本団女氏による飯地町における地歌舞伎の歴史の説明、演目発表とあらすじ解説ののち、配役、稽古日などが決められた。

まず、団女氏は次のように参加者に説明を行った。

飯地町では江戸末期から町内6つの神社すべてで地芝居が行われており、昭和27年には歌舞伎保存会が発足した。大田神社の祭りの余興として毎年4月9日に行われた地芝居は、その後、会場を五毛座へと移し、途中から隔年開催となったが、現在までに29回を数え、2023年の公演で記念すべき30回目となる。松本団升氏（団女氏の父・師匠）が、飯地町で歌舞伎の振り付けを初めて行ったのは、昭和25年、大田神社境内での地芝居においてである。

団升氏、団女氏合わせると、飯地町との関係はすでに70年近く続いていることとなる。

次に、「寿式三番叟」「白浪五人男」「妹背山婦女庭訓」という3題の演目が発表された。事前に演者候補の情報を得て、これまでに上演した演目との関係も考慮しつつ団女師が選定した演目である。このうち前者2題は子どもたちによるもので、団女師は子どもたちの背格好や希望（日本駄右衛門、弁天小僧、赤星十三郎は希望者あり）を確認した上で、配役を決めていった。

「寿式三番叟」は、通常、翁・千歳・三番叟の三役で演じられるが、翁1名、千歳と三番叟はそれぞれ2名、計5名の飯地小学校児童で演じることとなった。また、全員が女兒であったため、翁と千歳は、「姫」の衣装で、振り付けも女性らしいものとなった。

「白浪五人男」は、恵那北中学校生徒6名、中野方小学校児童1名、飯地小学校児童4名によるもので、このうち中学生1名は裏方で照明を担当した。主役ともいえる五人男は中学生5名が、その捕手と捕手頭は小学生5名が演じることとなった。

飯地五毛座歌舞伎保存会による「妹背山婦女庭訓」の配役は、すでにメンバーについて熟知している団女氏があらかじめ想定していたようで、当日、会合に参加できなかった保存会会員も含めてスムーズに



台本の読み合わせをする子どもたち

決定した。

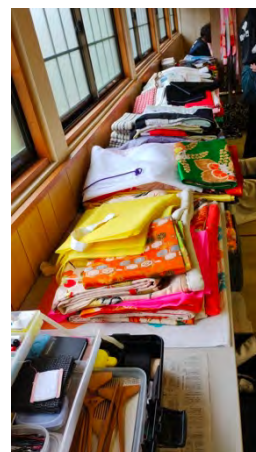
本番の4月15日までの稽古は、3月6日、10日、14日、22日、25日、26日、4月1日、2日、3日、8日、9日、11日、12日、13日、14日となり、14日は、義太夫に合わせての三味合わせで、子どもたちは学校があるため、このうち3回は参加できず、4月15日本番に臨むこととなった。その場で、「白浪五人男」を演じる子どもたちには該当箇所の手作り台本が配布され、そのままセリフの読み合わせに入った。一つ一つのセリフの、イントネーション、アクセント、スピード、声音、音高、間合いなどの指導が入りつつ稽古が進行した。義太夫については、練習の間は団女氏の所有するテープを用いることが説明された。

3. 公演当日の様子

4月15日公演当日は、11時の開場に合わせて近隣からの観客のみならず、東濃地区の歌舞伎保存会の面々、地歌舞伎公演再開を楽しみにしていた地元を離れた人々や、地歌舞伎ファンらが会場である五毛座を訪れた。劇場周辺には臨時の駐車場も設けられ、地元の人々による車の誘導など、安全への配慮がなされていた。

劇場内では、2階上手下手の栈敷席前の手すりから多くの寄付を示す半紙がぐるりと吊り下げられ、祝祭感を高めていた。

一方、楽屋では、役者、団升一門、飯地歌舞伎保存会会員、子どもたちの保護者らが総出で着付けや化粧を進めていた。所狭しと置かれた大量の衣装や髷、小道具などはすべて団女氏保有のものである。



当日用いられた衣装



当日用いられた髷

本公演では料金を取ることではなく、訪れた観客が大入り袋に各々最良の

役者の名前と自分の名前を書いて、公演中に役者に向かって投げる。芝居が盛り上がると客席や舞台には大入り袋が飛び交い、2階席からも雨霰のように大入り袋が降ってくる。これらは、公演後、それぞれの役者に届けられるが、最年長の役者のもとは5万円以上の花代が届けられたという。届けたい相手の名前を書いていることから思う存分

投げるができるし、送られた方も送り主がわかるため公演後にお礼を伝えることができ、舞台を盛り上げるだけでなく、関係性確認の上で一役買っている。

子どもたちによる「寿式三番叟」「白浪五人男」は、ほぼ間違えることなく順調に進み、温かい拍手に包まれた。「中野方めれた囃子」は、古くから中野方に伝承される芸能で、毎年春の笠置神社大祭で奉納されてきた。雨乞いの神事でも演奏されていたことから、別名を「雨乞い囃子」というとのことであった。最後の演目「妹背山婦女庭訓」では、大柄な男性4名による官女の演技に笑いがおき、官女らに散々にいじめられる健気なお三輪の演技を見守った。途中で浅葱幕が落ちないというハプニングに見舞われたが、保存会メンバーの臨機応変な対応によって舞台進行にはさほど影響は出ず、拍手喝采のもと幕が閉じられた。

終演後には、ツケ打ちとして舞台進行を傍らから見守っていた団女氏も役者らと共に舞台上がり、もともと神社への奉納芸能として演じられたことが語られ、観客への感謝の言葉が述べ

られた。

当日はあいにくの雨模様であったが、五毛座前に設営されたテントでは、朴葉寿司や五平餅、柚子を用いた食品などの特産品が販売され、それらを土産に購入する人々で盛況であった。

なお、本公演の様子はYouTube（<https://www.youtube.com/watch?v=ZqbDyB6KW8Y>）において公開されている。

4. 2023 年度プロジェクト総括

五毛座では、コロナ禍が収まった2022年には恵那市出身の歌舞伎俳優・中村いてう氏を含む中村座一門の若手ら「鶴の子会」によって大歌舞伎上演が行われた。この公演には地元の小学生が招かれ、2階桟敷席より身を乗り出すようにして観劇していた。2023年の飯地五毛座歌舞伎公演では10名の小学生が「寿式三番叟」に5名、「白浪五人男」に5名の小学生が参加したが、大歌舞伎を実見した経験が参加の動機のひとつとなっている。2024年4月には中村勘九郎、中村七之助を筆頭に、中村座一門による大歌舞伎公演が決まっており、地元での地歌舞伎への関心を育てるきっかけとなることが期待される。令和5年8月現在、飯地小学校の生徒数は19名である。彼らに地元の芸能に親しむ機会を提供することは、伝統継承において極めて重要であるが、今回のように飯地町に限らず周辺地域にまで参加者の範囲を広げることも有効なことであろう。



「寿式三番叟」の一場面



中野方めれた太鼓の一場面



「白浪五人男」の一場面



「妹背山婦女庭訓」の一場面

【参考資料】

恵那市役所報道発表資料（令和5年3月24日付）

【参考サイト】

飯地小学校 <http://www.ena-gif.ed.jp/ijji-e/cat1/>（最終閲覧日 2024年2月25日）